

この1年に、あなたを夢中にさせたふしぎ本は？

選者コメント

1. 『幻坂』有栖川有栖 メディアファクトリー 2013

※著者が愛する故郷・大阪の古層を遺す「天王寺七坂」を舞台とする連作短篇集。「私はその界隈を歩くと、糸より細い声で大阪が歌っているのを微かに聴く。リアリズムを担う街が秘めてきたファンタジーを感じて、「聴こえてるよ」と応えたいくなる」という「あとがき」の一節に痺れた。「慰霊と鎮魂」という怪談の本質を、しみじみと実感させるジェントル・ゴースト・ストーリーが連なる。それはまた、連載中に起きた東日本大震災への鎮魂曲でもあるのだろう。

2. 『たけこのそう』大濱普美子 国書刊行会 2013

※著者はドイツ在住で、本書がデビュー作とのこと。実に落ち着いた筆の運びで、穏やかな日常に忍びより、いつしか融合する異界の姿を、さまざまに描き出す短篇集である。慕わしき死者の記憶を、卓抜な構成のうちに封じ込めた「孟蘭盆会」、つげ義春の世界をどことなく連想させるような、不思議な界隈へとドロップアウトする感覚が絶妙な「浴室稀譚」、エキゾチックな幽霊小説の佳品「フラオ・ローゼンバウムの靴」など、収録作六篇それぞれが一読忘れがたい読後感を残す。

3. 『パトロネ』藤野可織 集英社 2012

※御存知、『爪と目』で芥川賞を受賞した新鋭が描く、幽霊純文学小説。部屋に憑くものと憑かれるものの関係性を、たくらみに満ちた着想と技巧で描き出して、慄然とさせる。個人的には芥川賞受賞作よりも、こちらのほうが好みかな、と思っていたのだが、つい先日刊行された短篇集『おはなしして子ちゃん』を読んだら、こちらにも本書に優るとも劣らない才気煥発な幻想小説集で、追加でオススメ。どの本にも、煌びやかな才気と、滴るばかりのビザール趣味、そして巧まざる黒いユーモアが満載で……いやはや凄い作家が出現したものだ。

ふしぎ初心者でも楽しめる本は？

4. 『暗黒のメルヘン』澁澤龍彦編 立風書房 1990

5. 『異形の白昼』筒井康隆編 立風書房 1979
6. 『贈る物語 Terror』宮部みゆき編 光文社 2002
7. 『日本の名随筆 怪談』高橋克彦編 作品社 1996
8. 『日本怪談集（幽霊篇）』（上下）今野圓輔編著 中央公論新社 2004

※「ふしぎ文学マスターが薦める
100冊」のコメントを参照。

9. 『世界幻想文学大全 幻想文学入門』東雅夫編 筑摩書房 2012
10. 『世界幻想文学大全 怪奇小説精華』東雅夫編 筑摩書房 2012
11. 『世界幻想文学大全 幻想小説神髓』東雅夫編 筑摩書房 2012

※ちくま文庫版〈世界幻想文学大全〉は、まさに初心者の皆さんに向けて、幻想文学というジャンルに参入する際に、絶対に読んでおいてほしい極めつきの名作を、歴史的な名訳で収録し、併せて、このジャンルの歴史と魅力をガイダンスする入門篇を付した、三巻セットのアンソロジー叢書です。まずは、ここから、スタートしてください！

12. 『日本幻想文学大全 幻妖の水脈』東雅夫編 筑摩書房 2013
13. 『日本幻想文学大全 幻視の系譜』東雅夫編 筑摩書房 2013

※〈世界幻想文学大全〉の姉妹篇として刊行中の日本版からアンソロジー篇の2冊を掲げておきます。こちら日本が生んだ怪奇幻想文学の名作だけを選びすぐって収録しています。再読三読しても全く飽きない、魅力に富んだ作品ばかりです。その卓越した文体とともに、繰り返し熟読玩味していただくことで、文学の醍醐味を体感できます、確実に！

ふしぎ上級者にすすめたい本は？

14. 『小説とは何か』（『文豪怪談傑作選 三島由紀夫集』に収録）三島由紀夫 筑摩書房 2007
15. 『思考の紋章学』澁澤龍彦 河出書房新社 2007
16. 『新編・迷子論』堀切直人 右文書院 2008
17. 『銀河と地獄』川村二郎 講談社 1985
18. 『日本幻想文学史』須永朝彦 白水社 1993
19. 『本朝幻想文学縁起』荒俣宏 工作舎 1985
20. 『新編 別世界通信』荒俣宏 イースト・プレス 2002
21. 『ロマン的魂と夢』アルバール・ベガン 国文社 1972
22. 『肉体と死と悪魔』マリオ・プラーツ 国書刊行会 2000
23. 『死の舞踏』スティーヴン・キング バジリコ 2004

※「ふしぎ文学マスターが薦める
100冊」のコメントを参照。



ふしぎ本以外で、あなたを夢中にさせた本は？

※幼い頃から「ふしぎ本」を探求することで、読書の世界を広げてきた人間としては、こういう質問が、いちばん苦手です（笑）。どんな本も、どこかで「ふしぎ」と関わっているものですから。とりあえず、机辺にあって、あまり「ふしぎ」とは直結しない本を挙げてみましたが……。

24. 『久保田万太郎全句集』久保田万太郎 中央公論社 1978

※「湯豆腐やいのちのはてのうすあかり」「鮫鯨もわが身の業も煮ゆるかな」——人生の指標たるべき名句多数。

25. 『随筆百花園』正岡容 労働文化社 1946

※空襲に追われて居所を転々とする日々によるべない営みが、震災後の現代にジャストフィット！

26. 『人生はうしろ向きに』南條竹則 集英社 2011

※畏友南條竹則の後ろ向きな持ち味が瞭然たる1冊。リア充に違和感を抱く若い人たちにこそ、読んでほしい。

27. 『こしかたの記』筒木清方 中央公論社 1986

28. 『日本橋檜物町』小村雪岱 平凡社 2006

29. 『東海道品川宿』岩本素白 ウェッジ 2007

※達意の文体と濃やかな観察眼で、東京の昔を教えてくれる名随筆集3冊。

30. 『遊歴雑記』（全5巻）十方庵敬順 三弥井書店 1995

31. 『雪国の春』柳田國男 角川学芸出版 2011

32. 『菅江真澄遊覧記』（全5巻）菅江真澄 平凡社 1988-1990

33. 『記憶への旅』（ベンヤミン・コレクション3）ヴァルター・ベンヤミン 筑摩書房 1997

※江戸の街を、みちのくの辺地を、ヨーロッパの諸都市を……歩き回る思索者たちのドキュメント4冊。そこにはおのずと、彼岸からの影が射す。

子どもの頃に読んで忘れられない本は？

※子どもの頃といっても、小学校4、5年生くらいからは普通に大人向けの文庫を読むようになっていたので（生まれて初めて買った文庫本は岩波文庫のカフカ『変身』、本屋のおばさんに「お父さんに頼まれたの？」と訊かれた）、それ以前の時期の本から選びました。

34. 『ひろすけ幼年童話文学全集』（全12巻）濱田廣介 集英社 1962

※幾度くりかえし読んだか分からない。当時は廣介童話の世界に住んでましたね（笑）。造本・装画も素敵でした。子どもの本のひとつの理想形かも知れません。

35. 『ファール昆虫記』（全8巻）アンリ・ファール 集英社 1991

※これは小学校の図書館のお気に入り。どこの版元の本か記憶にないのだけれど、割合に小ぶりのハードカバーでした。一種の異界ファンタジーとして読んでいた気がします。たとえば、佐藤さとるの〈コロボックル〉シリーズにも通ずるような。

36. 『墓場の鬼太郎』（全8巻）水木しげる 小学館 1976-1978

※生まれて初めて、自分のお金で町の本屋に買いに行った……「初めてのお遣い」本（私が買ったのは講談社 KC コミックス版ですが）。鬼太郎シリーズがメジャー化するきっかけをつくった本で、2巻目からは『ゲゲゲの鬼太郎』と改題されます。いま私が携わっている色々な仕事は、煎じ詰めれば、この一冊に集約できるでしょう。常に仰ぎ見る原点。



- ・平成24年度企画展示「ふしぎ文学マスターが薦める100冊」のブックリストは、中央図書館2階「泉名月記念ふしぎ図書館」にあります。
- ・リストの36冊（シリーズ含む）は、田原市図書館で貸出・予約可能な資料です。

2013.11 作成